特集◆〈敬意〉はどこから来るか

ポライトネス理論から見た〈敬意表現〉

――どこが根本的に異なるか

宇佐美まゆみ（うさみ　まゆみ）

月刊言語 30(12月号)
大修館書店 18-25頁
2001年11月

〈ポライトネス〉は日本語の〈丁寧さ〉や〈敬語使用〉といったものとは違う。では、〈敬意表現〉という「新」概念と同じものなのだろうか。答えは「否」。ポライトネス理論から〈敬意表現〉を斬る。

一　はじめに

平成一二年一二月八日、第二二期国語審議会第一委員会によって答申された「現代社会における敬意表現」は、最後の「国語審議会答申」ということもあって注目され、様々な反応を引き起こした。〈敬意表現〉という新概念が提唱されたと謳われたため、従来の敬語使用のみに縛られない「相手と場面に配慮した言葉遣い」を推奨したものとして一定の評価をする向きはあるものの、社会的価値観の変化の影響を受けながらも、未だ日本語の言語使用の重要な部分を占めている「敬語」や「敬語使用」についての指針がほとんどないこと、約半世紀も前の一九五二年の答申「これからの敬語」と比較しても、言語にまつわる問題、特に、敬語というものの本質について踏み込んで考える「ポスト近代」的な発想に欠けていることなどが指摘されている（ネウストプニー、二〇〇一）。様々な観点からの議論は、すでに幾つかまとめられているので（『日本語学』四月号特集、二〇〇一、『人文学と情報処理』三巻、二〇〇一）、ここではあえて触れない。本稿では、この答申の内容に強い影響を与えたことが明らかであるブラウンとレビンソンのポライトネス理論（一九八七）と、日本語におけるその「普遍性」の検証に関する一連の研究（宇佐美、一九九三b、一九九六；Usami, 1994, 1999等）に基づいて、純粋に学問的な観点から、〈敬意表現〉と名づけられたものの背後にある考え方とその誕生の経緯説明における問題点を指摘する。

二　ポライトネス理論と日本語に関する従来の研究動向

普遍理論であるとして提唱された、「ブラウンとレビンソンのポライトネス理論」（以後「ポライトネス理論」）に対して、これまでの英語圏の学界では、「ポライトネス」という普遍性を前提とした新概念を、一個別言語の「敬語使用の原則」と混同・同一視し、「欧米の言語と文化を背景にしてつくられたポライトネス理論は、日本の敬語を考えるにはふさわしくない」、「日本語では、敬語使用の原則の制約が大きいので、ポライトネス理論の一つの鍵概念である、話者個人のストラテジーとしてポライトネスを捉えることはできない」（Ide, 1989；傍点筆者）という批判や、「相手のフェイス侵害度の大きさに応じてポライトネスが規定されるとするポライトネス理論では、日本語には、『今日は、土曜日だ』というような、一見相手のフェイスを侵害するようには見えない発話にも、『～だ』『～です』『～でございます』などの『丁寧度』の違う表現があることが説明できない」（Matsumoto, 1988）など、ポライトネス理論の「普遍性」に疑問を呈する形の批判が、主に、非印欧語の研究者から出されていた。しかし、このタイプの批判には、一個別言語の「敬語使用の原則」を持ち出すことによって、ポライトネス理論の「普遍性」についての反例を示し得たと勘違いしている類のものが多かった。（批判自体の問題点は、宇佐美、一九九六を参照）

ただ、特にこの三〇年来、英語圏の学界においても、「欧米中心的思考」が反映された研究方法や結果の解釈に疑問を呈する声が高まり、欧米の研究者の間にも自省の意識が強まって、異なる価値観や視点を持つ研究を受け入れ、理解しようとする風潮が強くなっていた。それ自体は、歓迎すべきことであるが、そういう動向が、逆に、非欧米の研究者の研究や、非印欧語について、非欧米的な視点を打ち出す研究であれば、ほとんど無条件に受け入れられると言っても過言ではないような風潮を生んできたのが現状である。そのような中、ポライトネスに関しても、欧米の研究者によって提唱された「普遍理論」に対しては、非印欧語の視点から批判するほうが受けたといってもよいくらいであった。

三　ポライトネス理論の普遍性を検証する実証的研究

このような風潮の中、筆者は、ポライトネス理論の普遍性

を高く評価し、この理論が、基本的には、「日本語のポライトネスの原理」も扱い得るものであると主張してきた。ただし、そのためには、日本語における「ポライトネス」、および、「ポライトネス研究」を、言語形式としての敬語の研究だけに留めることなく、例えば、敬体が基調である会話で、親しみを表すために一時的に常体を使うというダウンシフトや（宇佐美、一九九五）、話題導入の仕方や頻度（宇佐美、一九九三b）、あいづちやいわゆる終助詞「ね」の「適切な頻度や割合」（宇佐美、一九九七）などの、敬語以外の「談話レベルでしか捉えられない言語行動」も分析対象とすることが必須であることを、自然会話をデータとした実証的研究に基づいて、これまで一貫して主張してきた（宇佐美、一九九六、二〇〇一に経緯を概観）。

ポライトネスと敬語を同一視して、「日本語では、敬語使用の原則の制約が大きいので、話者個人のストラテジーとしてポライトネスを捉えることができない」（Ide, 1989）という主張に対しては、「敬語使用の原則の制約が大きい日本語のような言語においてこそ、スピーチレベルのシフト操作や、終助詞の使用などの、敬語以外の要素が、無意識のうちにも『話者個人のストラテジー』として、ポライトネスに大きな役割を果たしている」ことを示して反論し（宇佐美、一九九五a等）、また、先述のMatsumoto（1988）の批判が、ブラウンとレビンソンの理論の「フェイス侵害度を見積もる公式」（キーワード集「フェイス侵害行為」参照）を考慮していない点を指摘し、公式で説明できることなどを示してきた（宇佐美、一九九八）。つまり、日本語のような複雑な敬語体系を持つ言語と、英語のような敬語を持たない言語の「ポライトネス」を同じ枠組みで公平に比較検討し、その「普遍原理」を探究するためには、個別言語の構造の違いに影響されやすい文レベルにおける敬語使用の適否のみでポライトネスを捉えることは不適切であると主張してきたのである。

また、ポライトネス理論の斬新な点の一つとして、ポジティブ・ポライトネスを前面に押し出した点をあげてきた。日本語では、通常、「ため口」など仲間うちの言葉は、「言語形式の丁寧度」は低くなる。しかし、これらの現象も、仲間意識を高めるポジティブ・ポライトネスになるというような、日本人が考える「言葉遣いの丁寧さ」という捉え方からは、ピンときにくいようなことを例にあげながら、「ポライトネス」という捉え方は、敬語を使ってさえいればよいというものではなく、相手にとって心地よいかどうかという「実質的な発話効果」を問題とするものであることを繰り返し説いてきた。以上の二点は、「ポライトネス理論が、基本的には、日本語にも適用できるという考え方にたって、日本語の現象を解釈した筆者の捉え方」であって、ブラウンとレビンソンが具体的に指摘していたことではない。そのためか、宇佐美の一連の実証的研究以外にこれらの点を主張するものは、これまでほとんどなかったと言っても過言ではない。

四　〈敬意表現〉の背後にある考え方の問題点

ところが、今回の答申の内容を見て、まず、驚いたのは、筆者がこれまで主張してきていた「日本語におけるポライトネス」の捉え方と非常に共通する内容や例が、〈敬意表現〉と名づけられたものの説明に含まれているという点であった。しかし、それ以上に驚いたのは、「敬語だけがポライトネスではないという捉え方」や、「ポジティブ・ポライトネスの重要性」など、ポライトネス理論の枠組みで考えたからこそ生まれるはずの発想と、それが依拠する円滑な人間関係のための言語行動の「普遍原理」という根本部分が、唐突に「日本文化維持の姿勢」と置き換えられて、そこにあったという点である。この点は、主査による概説（井出、二〇〇一）に顕著である。また、この概説の中で、ポライトネス理論に触れた部分の説明には、不正確な記述や論理の不整合が散見される。故に、ここでは、答申それ自体よりも、その背後にある考え方をより「専門的に」概説したもの（井出、二〇〇一）に基づき、純粋に学問的な観点から、〈敬意表現〉なるものの概念と、その誕生に付随する問題点を考える。以下に、まず、〈敬意表現〉の定義を示した後、その中身を分析する。

> 敬意表現とは、コミュニケーションにおいて、相互尊重の精神に基づき、相手や場面に配慮して使い分けている言葉遣いを意味する。それらは話し手が相手の人格や立場を尊重し、敬語や敬語以外の様々な表現からその時々にふさわしいものを自己表現として選択するものである。（答申：一頁）

この定義では、〈敬意表現〉を「ポライトネス」に置き換えても、なんら支障はない。むしろ、その逆で、「ポライトネス」が、〈敬意表現〉に置き換えられたと言ったほうが正確だろう。この定義自体を見ても、この概念が新しいどころか、ブラウンとレビンソンの定義する「ポライトネス」を、一般的な用語に噛み砕き、かつ、日本語にもあてはまることが分かりやすいように、敬語という具体的要素を文言に含めたものに他ならないことがよく分かる。ただし、ポライトネ

ス理論の専門用語では、「相互尊重の精神に基づき」、「話し手が相手の人格や立場を尊重し」とは、人間の基本的欲求としての二種類のフェイスを尊重することであり、「相手や場面に配慮して使い分けている」という部分は、フェイス侵害度の見積もりの公式によって、より具体的に使い分けの基準が算出され、適用されるということである。後半の「敬語や敬語以外の様々な表現から」という部分は、宇佐美（一九九三a等）が言う「談話行動、周辺言語」と通じるものであるし、「その時々にふさわしいものを自己表現として選択するものである」という部分も、「上述の公式によって、相手にどのくらい負担や迷惑をかけるかを見積もった上で、自分のフェイスも守りながら、話者が、意識的・無意識的ストラテジーとして、その状況に応じた表現を選択するのがポライトネスである」としたブラウンとレビンソンのポライトネス理論の捉え方、ほぼそのままである。以下に問題点をまとめる。

① 専門的観点から見ると、〈敬意表現〉なるものは、ポライトネス理論の概念や枠組み、および、それらが日本語に適用できるかどうかを検証した一連の研究の強い影響を受けていることは明らかである。にもかかわらず、〈敬意表現〉を「ポライトネス」の翻訳語と位置づけなかった点。

② のみならず、ポライトネス理論の肝心要の核である「合理的原理」の部分を見落とした形のポライトネスの表面的な解釈に、〈敬意表現〉というあたかも日本語の独自性を表しているかのように聞こえる名称をあてがい、さらに、科学的理論における鍵概念というよりは、日本的で道徳的な響きのある「配慮」「思いやり」「謙虚さ」というような概念を表面に追加することによって、しきりに、〈敬意表現〉には日本の慣習や日本文化維持の姿勢が示されていると印象づけようとし、もって、欧米の考え方とは異なる「新しい概念」が誕生したとして堂々と謳っているという点。

③ 「ポライトネス理論」では、「相手や場面に応じた言葉遣い」は、相手との「力関係」、「社会的距離」、「ある行為xが、相手にかける負荷度」という三要因の重みづけを各人が見積もり、その重みづけに見合った言語行動が選択されるという「適切な言語行動の選択基準の算出原理」の「普遍性」を理論の核の一つとして主張している。〈敬意表現〉では、この部分が完全に見落とされている点。このことによって、これでは何を基準にして、「相手や場面に配慮した言葉遣い」をすればよいのか分からないという感想を誘発することになっている。この点が、「ポライトネス理論」の枠組みを表面的に借用したとしか思えない〈敬意表現〉なるものと、「ポライトネス理論」が根本的に異なる点である。

ポライトネス理論は、基本的に、相手を思いやり、配慮することによって、相手とよい関係を築き、保つための言語行動の「普遍原理」を示そうとしたものである。ただし、何をすれば相手を思いやったことになるのか、どんな配慮をすればよいのかは、各々の文化によって異なる。そのことは、「適切な言語行動の選択基準の算出原理」の公式に、パラメータとして折込み済みである。つまり、表面に表れるポライトネスの表現方法は、当然、各々の文化によって異なるということは自明とした上で、それらの言語行動を引き起こす動因となっているのは、「相手の二種類のフェイス」に訴えかけたり、配慮したりするという対人コミュニケーション上極めて重要な行動であり、「そのような行動を引き起こす動因は、普遍的である」というのが、ブラウンとレビンソンの基本的主張であり、筆者が最も支持する点でもある。

しかし、〈敬意表現〉なるものの説明においては、これまで筆者が示してきたものと似たような例があげられていながら、そのような例が依拠するはずの円滑な人間関係のための言語行動の「普遍原理」という根本が、それとは全く相入れない概念である「日本文化維持の姿勢」にすりかわっているのである。このことによって、確かに、〈敬意表現〉なるものが基づく考え方が、「ポライトネス理論」の背景にある合理的な考え方とは根本的に異なるものであるということが、自ずと明らかになってはいる。

五 おわりに

井出（二〇〇一）は、「4 敬意表現のどこが国際的に通用するのか」の中で、「ポライトネス理論は、日本の敬語を考えるにはふさわしくない」とした自らの論文（Ide, 1989）に触れた後、「敬意表現は、普遍的ポライトネスの枠組みで説明できるものである可能性が見えてくる」（八頁、以上傍点筆者）と述べ、「敬意表現を世界に通用する視点で眺めることになるから、その（ブラウンとレビンソンの）枠組みで敬意表現を考えたい」（九頁）と書いている。しかし、もともと「敬語も含む日本語のポライトネス」を、わざわざ〈敬意表現〉と名づけたのであるから、それがポライトネス理論で説明できるのは当然である。この項は、結果的に、「日本語のポライトネス」を「敬語」と同一視していたIde（1989）の主張を自ら修正した形になっているが、「〈敬意表現〉は、敬

語より、普遍的に通用するようになっている」（二〇頁）という捉え方を持ち出すことによって、巧みに論理をすりかえている。しかし、「敬語より〈敬意表現〉のほうが普遍的に通用する」というような考え方自体が本末転倒である。なぜならば、そもそも、普遍理論とは、「様々な言語・文化における人間の多様な言語行動の中における共通する特性」の説明原理を、人々の無意識で自然な言語行動の分析に基づいて導き出そうとするものであり、日本人の自然な言語行動の中の、一要素ではあるが、主要である「敬語」の使用行動も、敬語以外の言語行動と関連付けて捉えることによって、「普遍原理」で説明できるからである（Usami, 1999）。それは、国際的に通用するしないというような人為的な考え方とはかかわりのない、現代日本人のありのままの言語行動なのである。

最後に、少し別の観点から、この問題を考えてみたい。それは、欧米を中心とする、主に、英語を発表手段とする学界と、日本の、特に、日本語研究が行われている学界との相互交流の貧弱さと、そういう現状が、双方の学界に引き起こしている問題が、ポライトネス理論と〈敬意表現〉と言われるものの誕生の経緯に、いかに象徴的に反映されているかという点である。新概念と謳われている〈敬意表現〉とは、基本的には、ブラウンとレビンソンのポライトネス理論の核である、「人は、相手のフェイス侵害度の見積もりに応じて、適切な言語表現を選択する」という原理の部分を、日本的な「思いやり」というような精神論に置き換え、それに、「ポライトネス」ではなく、日本的な〈敬意表現〉という名称をつけただけのものであると言っても過言ではない。そのために、理論が理論でなくなり、国粋的な精神論にすりかわる。それに対して、疑問を呈する声が八方からあがってくるほどには、ポライトネス理論研究の層は、日本ではまだ厚いとは言えない。それは、欧米の理論を扱うと、その理論の内容を真に吟味することもなく、欧米志向だとか、文化独自性がないなどと、批判的に捉える傾向も国内の学界には根強く残っていることと無縁ではないだろう。しかし、もし、「ポライトネス」が装いを変え、日本的精神論が加味された〈敬意表現〉になると、「国際的にも通用し、日本文化を維持する新概念」（井出、二〇〇一）として受け入れられるのだとしたら、日本の学界もおそまつなものである。それは、ひとえに欧米の学界との公正で対等な交流を避けながら、断片的な情報のみを巧みに取り入れ、国内だけでひとり「国際的」だと自己満足していることを示すに他ならないからである。そのような風土の中からは、真の意味で、オリジナルで国際的にも通用する研究が育ってくる日はまだ遠いと憂えざるを得ない。

最後になってしまったが、今回の国語審議会第一委員会の主査をはじめとする委員の皆様の多大なるご尽力に対しては、心から敬意を表したい。本稿は、専門的であることを旨としない「答申」自体の是非を論じるものではない。ただ、〈敬意表現〉という概念について、今後のポライトネス理論、および、言語研究の発展のために、純粋に学問的な観点から、必須であると思われる点を指摘したにすぎない。それが研究者の良心であり、使命であると考えるからである。これを機に、ご批判等も含めて、研究の場で、活発な議論が続けられればと願う次第である。

【引用文献】
井出祥子（二〇〇一）「国際化社会の中の敬意表現」『日本語学』二〇巻四号、四一-三頁、明治書院
宇佐美まゆみ（一九九a）「談話レベルから見た“politeness”：“politeness theory”の普遍理論確立のために」『ことば』、現代日本語研究会、一四号、二〇-二九頁
宇佐美まゆみ（一九九b）「初対面二者間会話における会話のストラテジーの分析－対話相手に応じた使い分けという観点から」『学苑』六四七号、昭和女子大学近代文化研究所、三七-四七頁
宇佐美まゆみ（一九九七）「談話レベルから見た敬語使用－スピーチレベルシフト生起の条件と機能」『学苑』第六三号、昭和女子大学近代文化研究所、三七-四三頁
宇佐美まゆみ（一九九七）「「ね」のコミュニケーション機能とディスコース・ポライトネス」『女性のことば－職場編』（現代日本語研究会編）、ひつじ書房、三四一-三六八頁
宇佐美まゆみ（一九九八）「ポライトネス理論の展開－ディスコース・ポライトネスという捉え方」『日本研究・教育年報一九九七度版』東京外国語大学日本課程編、一四七-一六一頁
宇佐美まゆみ（二〇〇一）「談話のポライトネス－ポライトネスの談話理論構想」『第七回国立国語研究所国際シンポジウム報告書－談話のポライトネス』国立国語研究所編、凡人社、九-五六頁
J・V・ネウストプニー（二〇〇一）「白鳥の歌－最後の国語審議会の敬意についての答申」『人文学と情報処理』三巻、勉誠出版
Brown, P. and Levinson, S. (1987) *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge University Press.
Ide, S. (1989) “Formal forms and discernment: two neglected aspects of universals of linguistic politeness”. *Multilingua* 8, 223-248.
Matsumoto, Y. (1988) “Reexamination of the universality of face: Politeness phenomena in Japanese.” *Journal of Pragmatics* 12, 403-426.
Usami, M. (1994) “Politeness and Japanese conversational strategies: Implications for the teaching of Japanese.” Unpublished qualifying paper. Harvard University.
Usami, M. (1999) “Discourse politeness in Japanese conversation: Some implications for a universal theory of politeness. Unpublished doctoral dissertation.” Harvard University.

（東京外国語大学／言語社会心理学・日本語教育学）